

山陰地方における綾羅木系土器の展開

田 畑 直 彦

要旨 弥生時代前期において、福岡県豊前地域から福井県若狭湾沿岸まで分布する綾羅木系土器のうち、山陰地方の土器について壺形土器を中心に検討を行った。前期中葉以降の山陰地方における壺形土器の基本的な属性は瀬戸内と共通している。綾羅木系土器の搬入品や忠実な模倣品は少なく、胴部形態と文様を模倣するものや無軸羽状文を多様な部位に施文するものが多い。これらは突帯文土器から遠賀川式土器への移行とともに出現する独自の地域色であり、縄文系の集団と人の移住を伴う北部九州・長門、瀬戸内との地域間交流によって発現したものと考えられる。

1 はじめに—研究小史—

弥生時代前期においては、福岡県豊前地域から福井県若狭湾沿岸地域において貝殻施文をもつ壺が分布していることがよく知られている。島根県を中心とした山陰地方における研究史は村上勇・川原和人氏(村上・川原1979)磯田由紀子氏(磯田1988)によってよく整理されているが、筆者なりに要点をまとめておきたい。

山陰地方における弥生前期の土器研究は1948年、杉原莊介氏の原山遺跡の報告に始まる(杉原1948)。杉原氏は原山遺跡の主体となる土器が北部九州の立屋敷土器であるとした。

1962年、藤田等氏は上野遺跡の報告において、出土土器を上野第1～4形式に分け、このうち、第1、第2形式を前期後半に位置づけた。そして、第1形式は高槻式土器で、山陰であまり変化することなくスムーズに東に進展したもの、第2形式は瀬戸内の阿方・片山式と極めてよく類似しているものであるとした。壺については、第1形式は文様をもつもの、第2形式は沈線、及び貼付突帯、もしくは両者が組み合うものを基準に設定されており、「山陰では高槻式が非常にスムーズに展開していることは注目すべきである」とした。しかし、その後、高槻式については新たに土井ヶ浜I式を具体例として挙げ、それらは下関から山陰に展開し、島根県江川以西にわずかに波及したとし、先と反対の見解を示した(藤田・潮見1967)。

その後、現在の基本的な認識の基礎を示したのが山本清氏である。1969年、山本氏は前期を二分して、前半をほぼ立屋敷式に準ずるもので、若干の地域の変差を包含するものとした(山本1969)。後半は全体の器形なり部分的手法において、前者とは相当な差異を示すものを一括し、器形や文様において山陽地方との共通点を指摘した。また、高槻式については、土井ヶ浜I式と対比し、胴部の突帯や口縁部の内面突帯をもつものの例を挙げ、「めったにみかけないものであるから、一般的に言えば、そう強い影響はみられなかった」とした。山本氏の見解は器形や口縁部内面、胴部の突帯など、文様以外の属性で比較したことが評価されよう。藤田氏の解釈の変更も文様以外の点に着目しての結果であろうと推察される。

1970年代にはいると東森市良氏によって、山本氏の見解が受け継がれることとなる。東森氏は山本氏の編年を踏まえて前期を二分し、前期後半以降瀬戸内からの影響のもとに展開していくとした（東森1972）。そして、1977年に東森氏らはそれまでの研究史をまとめ、鳥根県における弥生土器の集成と編年を行った（東森・前島・松本1977）。しかし、村上氏、川原氏が指摘するように立屋敷式、高槻式をどのように捉えているのかが不明確である。1979年、村上勇・川原和人氏は原山遺跡出土土器の再検討を行い、原山遺跡出土土器を北九州地方の直接的な影響下に成立した山陰最古の弥生土器であるとして、『出雲原山式土器』を設定した。また、上野第1形式について、「出雲原山式土器が山陰地方の独自の歴史的特色のもとに変遷をとげたと理解することができ、これを九州・高槻式土器とあえて規定する必要は認められない」とした。その根拠として上野第1形式の壺（貝殻施文土器）が少ないことが挙げているが、具体的な土器の特徴については触れていない。

1988年、磯田由紀子氏はそれまでの問題点を整理し、「断片的な資料に立脚、地域内での発達と変遷の方向性が明らかでなかった」とし、佐原氏の分類に習って、段、ヘラ描沈線、削出突帯、貼付突帯を基準とし、これに形態変化を加味した型式分類に基づく編年案を示し、器形や区分文様において山陽・畿内とほぼ同様に変化していることを明らかにした。「高槻式」との関係については、山本氏、川原・村上氏同様、強い影響は見られないとの見解を示した。

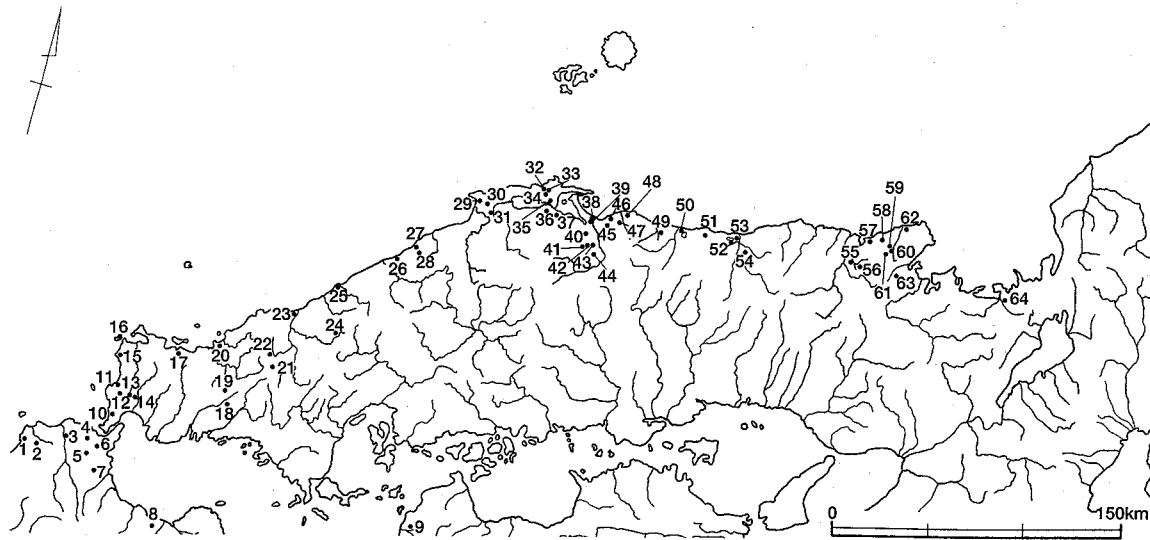
近年の研究の到達点は松本岩雄氏らによってまとめられた『弥生土器の様式と編年』に示されている（正岡・松本編1992）。「高槻式」との関係について、出雲・隠岐地域では前期末になると貝殻施文をもつ壺が大幅に減少すること、綾羅木Ⅲ式の壺の特徴である口縁内面肥厚が少ないことなどが述べられている。

丹後地域については、黒田恭正氏（黒田1983）、石井清司氏（石井1989）によって、基本的には畿内に準じた土器の変遷が明らかにされているが、まとまった資料が少ないため、詳細については不明な点が多い。石井氏は竹野遺跡、函石浜遺跡、松ヶ崎遺跡出土の貼付突帯と貝殻施文を併用した壺を新段階に位置づけている。また、釋龍雄氏は貝殻施文土器の出土量が海岸部に多く内陸部で少ない傾向にあること、貝殻施文土器は壺の胴部に限られ、羽状文が大半を占めることを指摘し、貝殻施文土器の分布についても論じている（釋1988、1992）。

このほか、山陰地方における貝殻施文の分布については、高橋護氏の論考がある（高橋1987）。高橋氏は貝殻施文の分布圏と関連して、山陰に広くみられる刻目をもたない突帯文土器をあげ、その文化的区分がそれ以前に遡る可能性を指摘する。そして、弥生前期においては、初期の段階は山陽地方と同様の土器が分布し、中段階の後半からしだいに貝殻羽状文系の文化が浸透し、近畿地方北部への到達は山陰地方よりも遅れるとした。また、前期から中期への転換のなかで、極めて顕著な変動として貝殻羽状文土器文化圏の解体を挙げ、山陰地方が山陽地方と一体化して中国地方の文化を形成するなかで、山陽・四国系の内部に進行していた地域分化と結合して他地方との分離を生じさせ、一方で相互に親縁な様相を示す文化圏を形成したとする。

高橋氏の論考は遠賀川式土器全体のなかで貝殻施文の分布を捉え、その広がり及び意味について考察した点で高く評価される。しかし、前期前半の古浦遺跡、原山遺跡出土の壺に羽状文や貝殻施文がみられることから、いちがいに山陽地方と同様の土器が分布しているとはいえない。また、中段階の後半から次第に貝殻羽状文系の文化が浸透していくとするが、貝殻施文は前期末には減少しているとみるべきである。

以上、研究史を概観したが、これまでの研究成果と近年の発掘調査例から、山陰地方の弥生時代前期の土器は①前期前半は北部九州の影響があること、②前期後半は瀬戸内の影響下があること、③「高槻式」



1 今川	11 中ノ浜	21 惣の尻	31 三田谷 I	41 清水谷	51 青谷上寺地	61 途中ヶ丘
2 大井三倉	12 吉永	22 大蔭	32 北講武氏元	42 宮尾	52 桂見	62 竹野
3 立屋敷	13 下七見	23 松ヶ丘	33 堀部第 1	43 諸木	53 岩吉	63 蔵ヶ崎
4 高槻	14 上ノ原	24 イセ	34 古浦	44 口朝金・天王原	54 西大路	64 丸山河床
5 高津尾	15 土井ヶ浜	25 鱒石	35 朝酌川遺跡群	45 尾高御建山	55 駄坂川原	
6 井手尾	16 沖田	26 渡来浜	36 田和山	46 今津岸の上	56 舟隠	
7 下稗田	17 湯免	27 川向	37 布田	47 上野	57 函石浜	
8 台ノ原	18 小路	28 古屋敷	38 長砂	48 大塚岩田	58 松ヶ崎	
9 岩崎	19 赤妻・上東	29 原山	39 目久美	49 イキス	59 扇谷	
10 綾羅木郷	20 宮ノ馬場	30 矢野	40 古市遺跡群	50 長瀬高浜	60 七尾	

図 1 山陰地方における弥生時代前期の主要遺跡（本文関連遺跡を含む）

E類 口縁部に段をもち、口縁部内面に1条の直線文をもつもの。

F類 口縁部内面に貼付突帯をもつもの。口縁部の形態や文様で3つに細分する。F-1：口縁部に段をもつもの、F-2：直線文をもち、口縁部が短く開くもの。F-3：F-2の口頸部が発達したものの。

G類 口縁部内面に肥厚帯と貼付突帯をもつもの。G-1～3類に細分する。G-1：口縁部に段をもつもの。G-2：沈線もしくは削出突帯をもち、口縁部が短く立ち上がるもの。G-3：直線文もしくは削出突帯をもち、口縁部が大きく発達したもの。G-4：内面に肥厚帯のみをもつ大型壺。

J類 口縁部内面に立ち上がり貼付突帯をもつ内折口縁壺。J-1～3類に細分する。J-1：口縁部が短く外反するもの。J-2：口縁部が大きく発達したもの。J-3：頸部が短く直立し、口縁部が短く外反するもの。

K類 口縁部及び胴部が無文で、口縁部が短く外反するもの。

L類 口縁部及び胴部は無文か貼付突帯をもち、頸部が垂直に立ち上がって口縁部が短く外反する城ノ越系壺

M類 口縁部内面に肥厚帯、貼付突帯をもち、口縁部と胴部に貼付突帯をもつG-3類の系譜を引く城ノ越系壺

これらの形態はF-3、G-3、J-2、J-3が器高が胴部最大径を上回るほかは、器高が胴部最大径をやや上回るか、ほぼ等しい。

表1 山陰地方における弥生時代前期～中期初頭の土器編年

	長門		石見	出雲・隠岐	伯耆	因幡	但馬	丹後
I a	角島・沖田	I 1	大薩2区	三田谷 I	長砂第4	+	+	+
I b	吉永⑤地区SK048 綾羅木郷EⅢ地区L.N9							
II	綾羅木郷TⅡ地区L.N5510	I 2	イセSB2・3 古屋敷SKY-09	北講武氏元貝塚中・下層	長瀬高浜SI71	+	+	+
III a	綾羅木郷 AⅢ地区L.N59・K地区101 RⅣ地区L.N5420	I 3	鱒石Ⅲ区4号土坑 古屋敷SKY-02	タテテョウ・西川津	長砂第3	西大路土居・桂見・岩吉	駐坂川原	竹野・松ヶ崎・途中ヶ丘
III b	綾羅木郷AⅢ地区L.N60・61	I 4	古屋敷SKY-05	タテテョウ・西川津 布田Ⅳ区SD03・SK44	清水谷環濠 今津岸の上環濠	西大路土居SK08・09		
中 期 I	綾羅木郷TⅠ地区L.N5318 PⅡ地区L.N5019、5026	II	+	タテテョウ・西川津 布田Ⅳ区SK37・GSK02	古市流田	青谷上寺地SK2・SD4	駐坂川原 舟廻7・12・13号周溝	畷谷環濠

(2) 編年 (図2)

I - a 期

綾羅木Ⅰ式に先行する資料で、まとまった資料はないが、角島・沖田遺跡からこの時期の資料が出土している(古庄編2000)。壺はA～C類がみられる。大型の壺には丹塗磨研を施すものがある。福岡県津屋崎町今川遺跡(酒井・伊崎1981)、宗市大井三倉遺跡(酒井1987)など福岡県宗像地域の土器に近似している。

I - b 期

綾羅木Ⅰ式に相当する。壺の資料は少ないが、前段階と大きく変わらない。A類は極めて少なくC類が主体となる。吉永遺跡⑤地区SK048からも良好な資料が出土している(田畑2002)。壺の文様は山形文、有軸羽状文が主体で、単一の文様のみが施される。後述するように、この段階に鋸歯状圧痕がつかない貝が使用されていた可能性がある。

II 期

綾羅木Ⅰ式の後半と綾羅木Ⅱ式に相当する。B・C類に加えて口縁部の内面に直線文をもつE類が出現する。ただし、B類も多い。大型のC類は口径・頸部が大きく広がり、B類とは異なる形態となる。施文具に鋸歯状圧痕のつかない貝及びタマキガイの腹縁を使用するものが出現する。文様は無軸羽状文、重弧文、山形重弧文、鋸歯文などがあり、無軸羽状文が主体を占める。また、文様帯を区画する胴部中位の直線文下に重弧文、鋸歯文などが付加されて、文様帯が拡大するものが多くなる。このほか、底部をミガキにより円盤貼付状に突出させたものが出現する。

III - a 期

綾羅木Ⅲ式Aに相当する。壺の口縁部が長く発達し始める。壺の口縁部の内面肥厚帯や内面突帯をもつF-1・2、G-1・2類が出現する。頸部が発達したF-3、G-3類も出現するが、次段階に比べると口頸部は未発達で、大型化は達成されていない。また西北部ではJ-1類が出現する。

この段階になると、①口唇部に直線文を施すもの、②文様帯の拡大に伴って、胴部中位に断面台形、M字状の貼付突帯が施されるもの、③羽状文は文様帯を2つに分けて施したもの、④底部を台形状に突出させ、外面に直線文を施すものなどが出現し、壺の加飾化が顕著となりはじめる。また、タマキ貝による施文が増加し、板状工具による押圧施文が出現する。

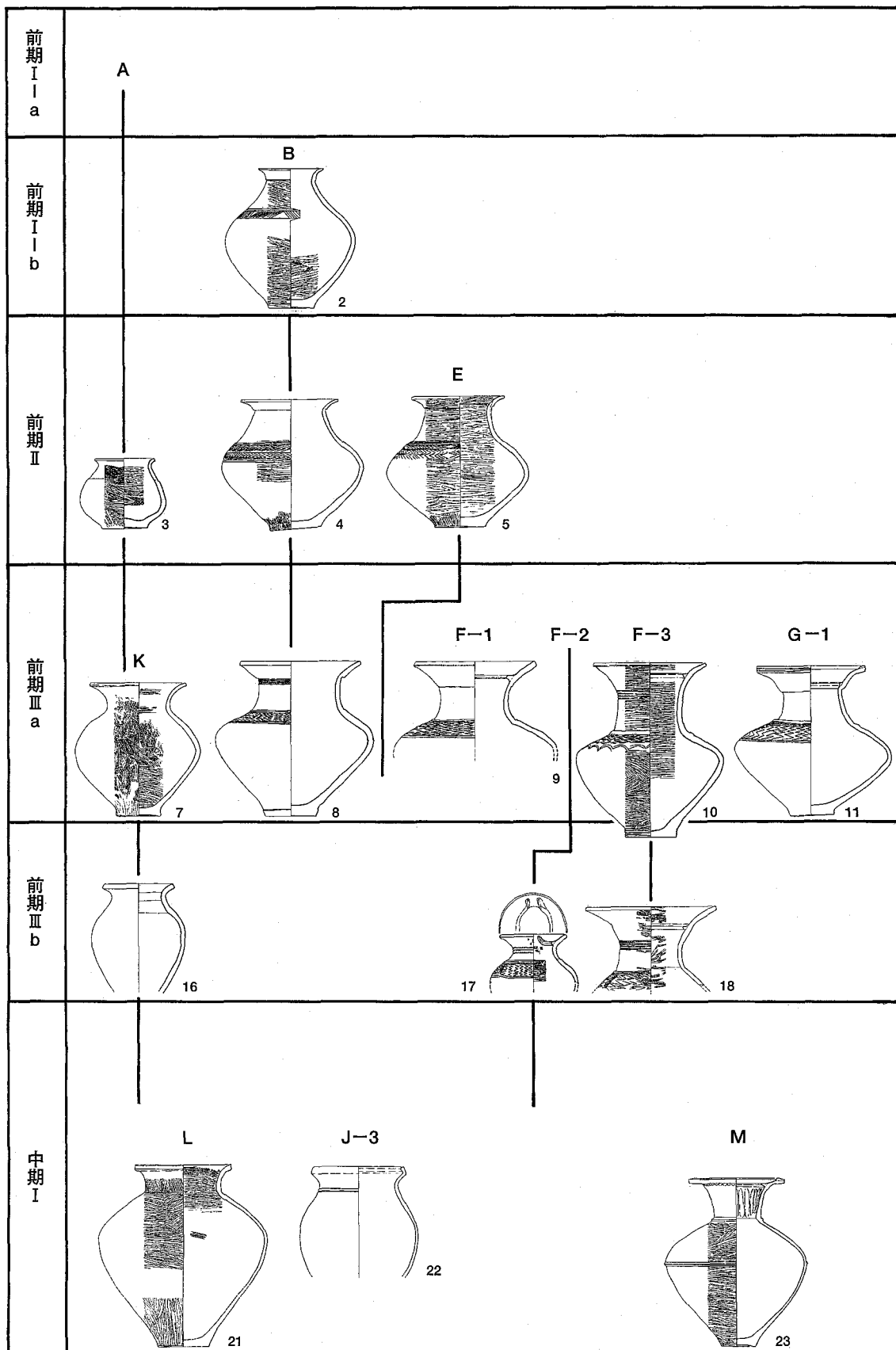
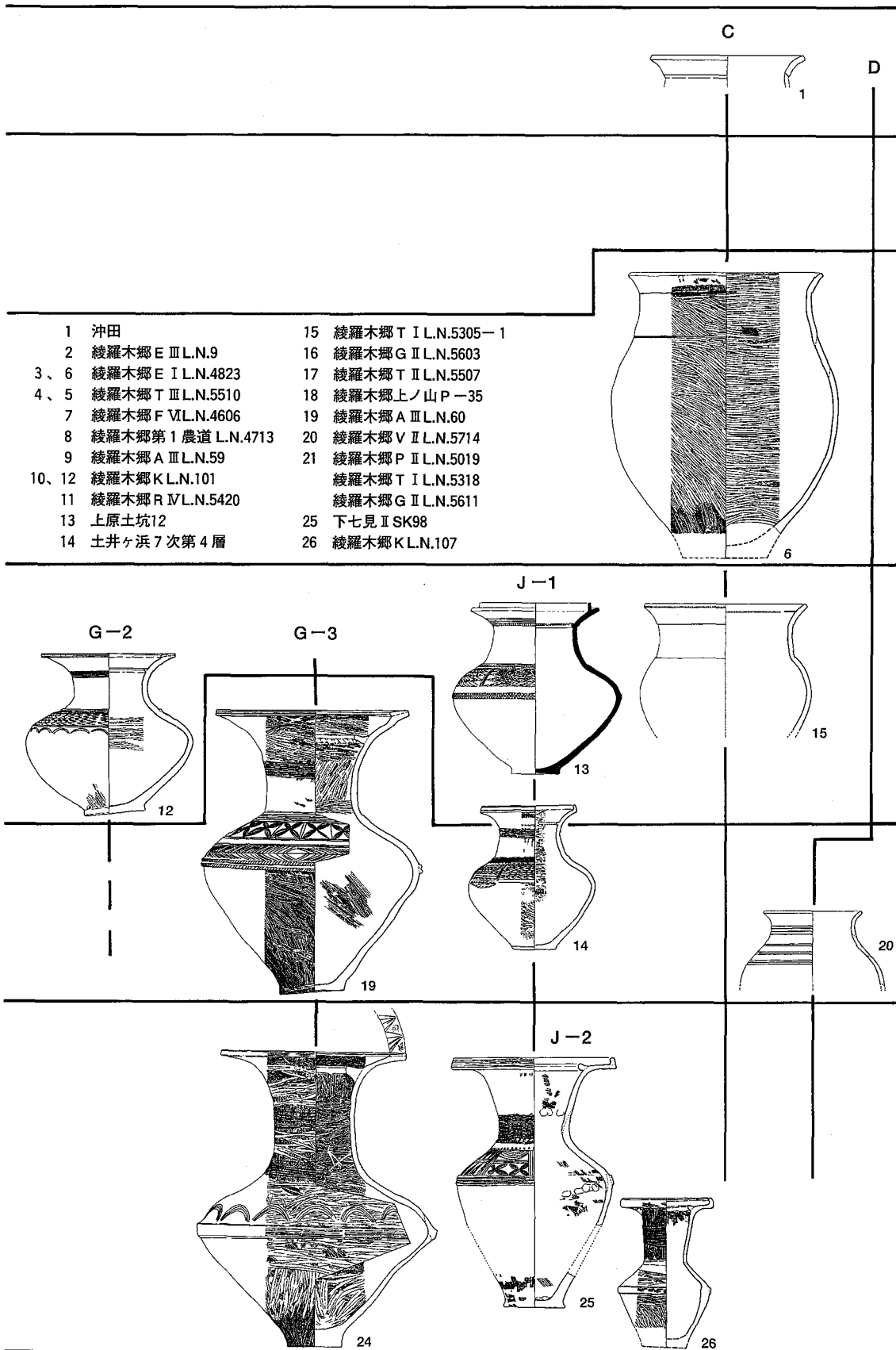


図2 長門における弥生時代前期～中期初頭の壺の編年 S = 1 / 12



Ⅲ - b 期

綾羅木Ⅲ式Bの前半に相当する。口頸部の発達したG-3類が主体を占める。胴部にはハケを残すものが多い。また前段階には僅少であったD-1・2類が再びみられるようになり、瀬戸内の影響が考えられる。胴部文様は器形の大型化に伴って拡大し、1段の文様帯間を木葉文や縦向きの羽状文で区画するものが多くなる。

中期Ⅰ期

綾羅木Ⅲ式Bの後半とⅣ式の一部が相当する。綾羅木郷遺跡ではG-3類が主体を占めるが、文様は雑になり、省略されたものが目立つ。綾羅木郷遺跡で明確な共伴例は報告されていないが、この時期に城ノ越系土器が出現すると考えている。また、西北部ではJ-2類が出現するが、綾羅木郷遺跡では少ない。J-2類はその形態から城ノ越系のL類の影響を受けたものと考えている。一方で下七見遺跡や周防・上東遺跡などでJ-2類に櫛描文を伴う例が見られることから、この段階に櫛描文が出現すると考えている。

(3) 貝殻施文の出現

遠賀川式土器における貝殻施文の土器で最古に位置付けられるのは、福岡県那珂遺跡第1号貯蔵穴から出土の壺でザルガイによる重弧文が施されている(山口編1992・行橋市教育委員会2002)。時期は筆者の編年の板付Ⅱa-1式に位置づけられる(田畑2000)。Ⅰ-a期は押引によるいわゆるヘラ描が主体であるが、一部でハマグリなど鋸歯状の圧痕がつかない貝による押圧施文が出現していると考えられる(田畑2002)^②。綾羅木系土器に一般的なタマキガイ・ベンケイガイによる施文^③は井手尾遺跡15号貯蔵穴出土土器、綾羅木郷遺跡PI地区5002出土土器にみられるようにⅡ期に出現する(行橋市教育委員会2002)。しかし、Ⅱ期においてはタマキガイ・ベンケイガイによる施文は以外に少なく、多くは鋸歯状の圧痕がつかない貝による押圧と考えられる(豆谷1995a)。Ⅲ-a期に至って胴部文様の加飾化が顕著になるとともに、タマキガイ・ベンケイガイによる押圧施文が増加する。

(4) 前期Ⅲ-a～中期Ⅰ期における壺の属性(図3)

綾羅木系土器の壺は各部位を装飾するので、個別に見ていきたい。

1. 口唇部

無文のもの、直線文が1～2条施されるもの、刻みが施されるものがある。施文具は板状工具、ヘラ描が多く、貝殻施文は少ない。無文のものは少なく、1～3条の直線文が施されるもの(1～3)が多い。このほか、土井ヶ浜遺跡、沖田遺跡、中ノ浜遺跡では少数ではあるが無軸羽状文を施したのものがある。これは後述のように山陰地方に多い属性であり、影響を受けた可能性が高い。

2. 口縁部内面

肥厚帯をもち、その下に貼付突帯をもつものが主体である。肥厚帯には無文のものが多いが、鋸歯文、山形文、羽状文を施すものがある。施文具は貝もしくはヘラ描で、板状工具によるものはほとんどみられない。内面突帯は無刻みの1条突帯が水平に巡るのを基本としている。

3. 頸部

Ⅲ-a期には段のほか、その直下に1～3条の直線文を施すものが多い。Ⅲ-b～中期Ⅰ期には3条～10条前後の直線文を施すものも多く、ハケやミガキにより削出突帯にするものもみられる。施文具は板状工具が多く、ヘラ描がこれに次ぎ、貝殻施文は少ない。また、施文位置は条数が多くても、全体に施文す

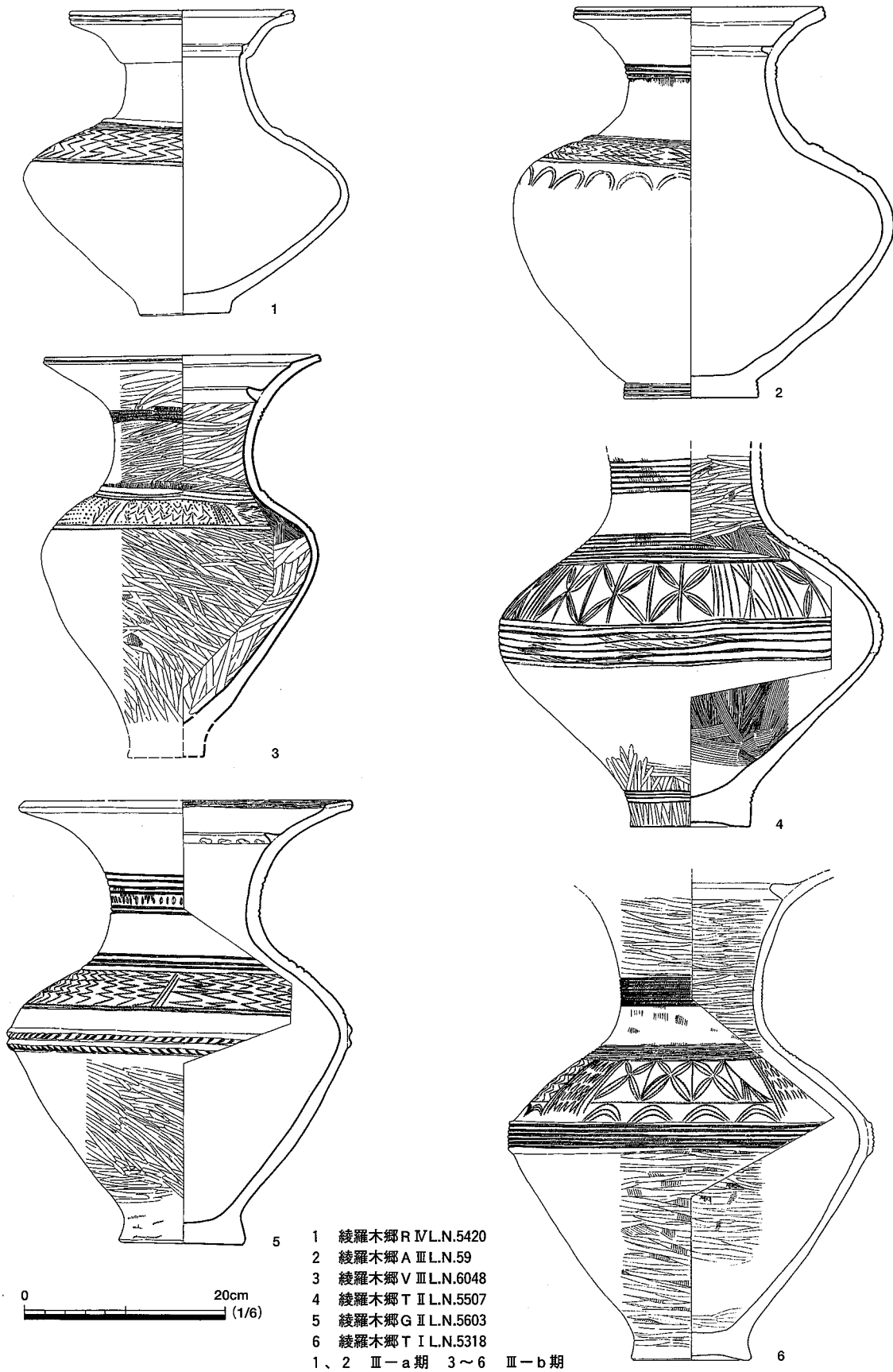


図3 綾羅木郷遺跡におけるⅢ-a~b期の壺

るものは極めて少なく、中位に集中的に施文するのが特徴である（3～6）。

4. 頸胴部界の区分文様

Ⅲ-a期には段、その直下に1～3条の直線文を施すものに加えて、断面台形の削出突帯を施すものが出現する（1、2）。突帯上には無文のほか2～3条の直線文を施すものがある。施文具は板状工具によるものが多く、ヘラ描がこれに次ぎ、貝殻施文は少ない。Ⅲ-b期～中期Ⅰ期になると、突帯上の直線文が5～7条のものが増加する。突帯には貼付によるものもあるが、胴部中位に比べて少ない。一方で段やその直下に3条の直線文を施すものものなど、古い属性も残存する（3）。このほか、直線文のみを施すものもみられる（5・6）。豊前においては、胴部中位と同様にM字状、三角形の突帯を施すものが多い。

5. 胴部中位の区分文様

胴部の文様帯の下位を区画する文様には、直線文、断面台形の削出突帯・貼付突帯、断面M字状、三角形の貼付突帯がみられ、貼付突帯が多い。綾羅木郷遺跡では、貼付突帯では断面台形のもの70%を超え、突帯上には2～6条の直線文が施される（6）。施文具は板状工具によるもの、ヘラ描、貝殻があり、板状工具による施文が多い。M字状の貼付突帯上には板状工具で羽状文を施すものが多い。なおM字状の貼付突帯は豊前地域に多くみられるが、無文のものが主体である。無文や胴部文様を区画する2～3条の直線文を施すもの（3）など古い属性も残存する。

6. 底部外面文様

前期Ⅱ期と同様にミガキにより、円盤貼付状を呈するものもあるが、突出部の幅が広くなり、2～5条の直線文が施されるものが多くなる（2）。また、タテハケにより浅く突出させるもの、直線文のみを施すもの（4）がみられる。施文具はヘラ描、貝殻、板状工具がみられる。ヘラ描が他に比べてやや多い。

3 山陰地方の綾羅木系土器

(1) 編年（図10）

検討を行う前に、出雲、伯耆地域を中心とした在来系土器の編年の概要を提示しておきたい。本稿では、一部の土器を除き、弥生時代前期～中期初頭の土器を『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編に準拠してⅠ-1～Ⅱ期に細分した。なお時期的にまとまった資料が少ないので、壺の細かな分類は行っていない。

Ⅰ-1期

北部九州の板付Ⅰb式、長門のⅠ-a～b期に併行する。出雲原山式土器とされてきた段階である。因幡より東の地域ではこの段階の土器は確認されていない。石見・大蔭遺跡⁴⁾では山口市小路遺跡、出雲・三田谷Ⅰ遺跡では東北部九州の板付Ⅰb式に近似した土器が出土しており、前後に二分が可能である。壺は無文のものと有段のものがあり、いずれも短く外反する。ヘラ描による山形文、重弧文、羽状文などが施される。

Ⅰ-2期

長門のⅡ期に併行する。因幡より東の地域ではこの段階の土器は確認されていない。石見・イセ遺跡、出雲・北講武氏元遺跡、伯耆長瀬高浜遺跡SI71からまとまった資料が出土している。壺は有段のものが主体である。直線文のもの、削出突帯のものが出現する。口縁部は長くなり、中程で折れ曲がるものが多くなる。胴部にヘラ描、貝殻施文の無軸羽状文を特徴とする綾羅木系土器が一定量出土する。

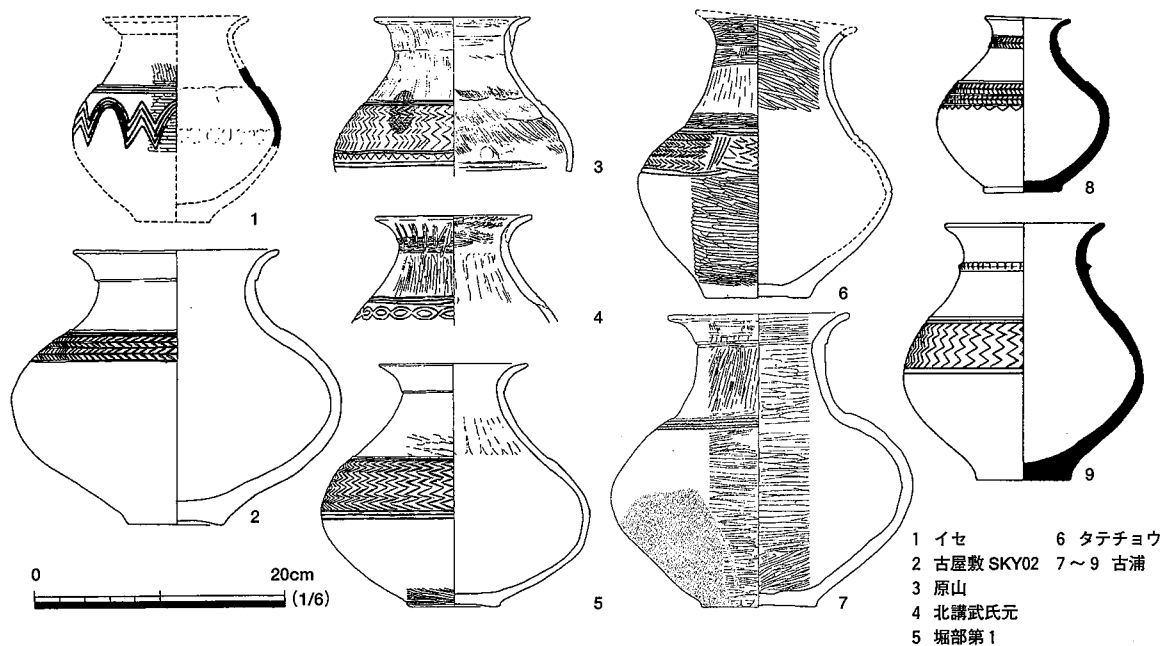


図4 山陰地方におけるI-1～2期の綾羅木系土器

I-3期

長門のⅢ-a期に併行する。断片的ではあるが、但馬、丹後でもこの時期の土器が認められる。石見・古屋敷遺跡 SKY-02、出雲・タテチョウ・西川津遺跡、伯耆・長砂第3遺跡、因幡・西大路土居遺跡でこの時期の資料が認められる。口縁部が長くなる。数条の直線文のもの、削出突帯をもつものが増加し、これらには口縁部が短いものが出現する(7)。綾羅木系土器が最も多くみられる段階である。

I-4期

長門の中期I期に併行する。石見・古屋敷遺跡 SKY-05、出雲・布田、タテチョウ、西川津遺跡、伯耆・清水谷遺跡、但馬・駄坂川原遺跡、丹後・途中ヶ丘遺跡、竹野遺跡、蔵ヶ崎遺跡などでこの時期の資料が認められる。壺の口縁部はさらに長くなり、段をもつものが失われ、多条の直線文を施すもの、数条の貼付突帯を施すものが増加する。器形もI-Ⅲ期までと異なり、器高に対して、胴部があまり張り出さないものが主体となる。綾羅木系土器は減少傾向にある。

Ⅱ期

長門の中期I期に併行する。出雲・布田遺跡、伯耆・古市流田遺跡、因幡・青谷上寺地遺跡 SK 2、SK 4、但馬・舟隠遺跡、丹後・扇谷遺跡でこの時期の資料が認められる。石見では良好な資料が少ない。器形はI-4期と共通しており、それらに櫛描文を施すものが出現する。綾羅木系土器は消失している。

(2) I-1～2期の綾羅木系土器(図4)

山陰地方最古の遠賀川式土器は出雲市三田谷I遺跡から出土している大型壺である(図11-25)。口縁部に段をもち、内外面に丹塗磨研を施している。これらは福岡県津屋崎町今川遺跡、宗像市大井三倉遺跡出土土器と極めてよく似ており、搬入品と考えられる。1は、響灘沿岸で特徴的な山形重弧文を施したもので、搬入品の可能性がある。I-1～2期に位置付けられる。I-2期になると、図4で示したヘラ描、貝殻による有軸、無軸羽状文などを施し、長門の前期Ⅱ期に似た壺が出現する(2、3、5～7)。現状では、この時期の土器の分布は鳥取県長瀬高浜遺跡を東限としている。一方で、3、8、9のように口縁

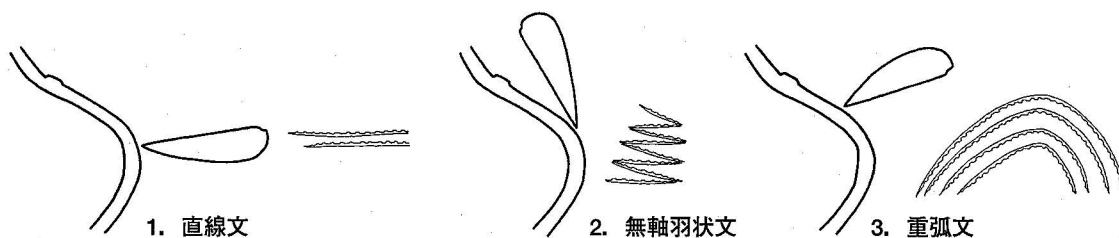


図5 貝殻施文様式図 (伊東1986から作成)

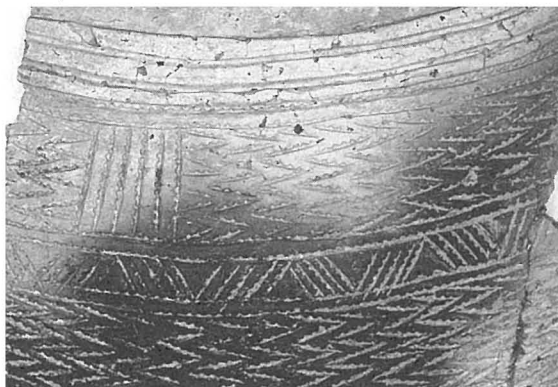


写真1 壺胴部 西川津遺跡 (図7-30)

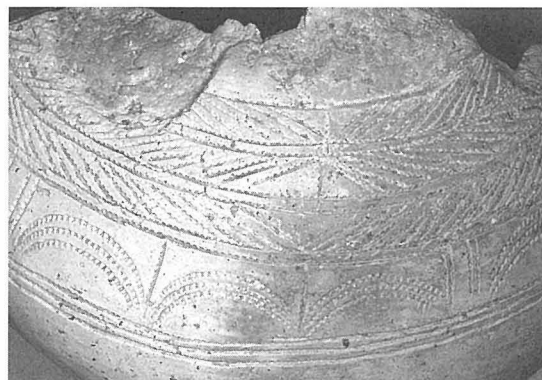


写真2 壺胴部 タテチョウ遺跡 (図8-24)

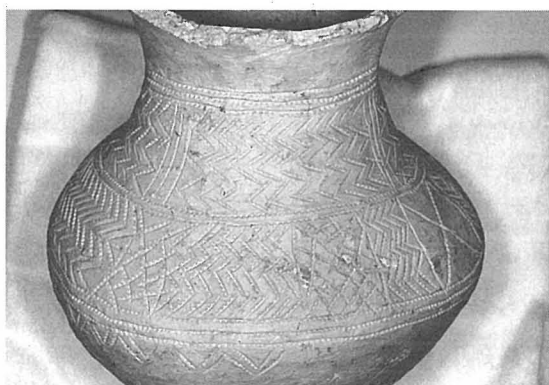


写真3 壺胴部 西川津遺跡 (図9-6)



写真4 壺胴部 蔵ヶ崎遺跡 (図8-8)

部が長く伸びるものや9のように頸部に突帯を施すといった瀬戸内と共通した特徴をもつものもある。これらの壺の口縁部内面に綾羅木系土器に特徴的な直線文を施すものはみられず、貝殻による胴部文様に共通点が多い。

しかし、その施文にも相違点がある。貝殻施文の原体であるタマキガイ・ベンケイガイは腹縁の殻内面に襞をもっている。綾羅木系土器に施された直線文、羽状文は、鋸歯状の圧痕が上を向いたものが主体であり、このことから殻頂を手のひらでにぎり、表面を下に向けて施文したと考えられている (図5、写真1、2 伊東1986)。しかし、なかには鋸歯状の圧痕が下を向いたものがあり、これは殻表面を上へ殻内面を下に向けて施文したものと考えられる (写真3、4)。これらは豊前、長門においても認められるが、量的には少ない。しかし、山陰地方では未実見で確認できていないものがあるためカウントしていないが、明らかに目立つ傾向にある。時期的にも北講武氏元遺跡の壺 (図4-4) や長瀬高浜遺跡の壺 (図8-5) の直線文など、I-2期から鋸歯状の圧痕が下を向いたものが出現している。

なお、瀬戸内側の愛媛県松山平野の貝殻施文の直線文をみると、鋸歯状の圧痕が下を向いたものが少なからず認められる⁶⁾。従って、鋸歯状の圧痕が下を向いた直線文、羽状文は綾羅木系土器の分布の縁辺部における模倣にともなうものと考えられる。

(3) I - 3 ~ 4 期の綾羅木系土器

綾羅木系土器と同じく各部位ごとに検討したい。破片資料が多いため、全形うかがえるものは非常に少ない。以下では綾羅木系土器に関わる属性をもつものについて述べたい。

1. 口唇部 (図6)

無文のもののほか、直線文が1~2条施されるもの(6、8、12、13、19)、上下端に刻みが施されるもの(1、10)、1条の直線文を施し、全面を刻むもの(7)、羽状文が施されるもの(2、14、15、17、18、20、図8-6)、斜格子文を施すものなどがある。長門では羽状文を施すものは非常に少なく、報告資料は10点に満たない。しかし、山陰地方ではタテチョウ・西川津遺跡だけで40点以上出土しており、盛んに用いられている。施文具にはヘラ、板状工具、貝殻があり、前二者が多い。

2. 口縁部内面の肥厚帯 (図6)

無文のものが多く、綾羅木系土器にみられる肥厚帯及びその模倣品は非常に少ない。A:綾羅木系土器に近似したもの(4、5、11、12、13)のほか、模倣に伴うものとして、B:肥厚帯がうすいもの(6、7、20)、C:肥厚帯の文様のみを模倣したもの(14~16)に大別できる。

4は口唇部下端に刻みを施している。肥厚帯の幅は約1.2cmと狭い。このように肥厚帯の幅が狭いものはⅢ-a期にみられること(図3-1)、口縁部形態からⅢ-a期併行と考えられる。11は口縁部内面を肥厚させ、その下位に貼付突帯を施している。口縁部の形態からⅢ-a期併行と考えられる。実見していないが、搬入品もしくは極めて忠実に模倣した土器と考えられる。12は口唇部に1条の直線文を施している。復元口径は約36cmで、口縁部は水平に近く外反する。Ⅲ-b期併行と考えられる。肥厚帯は厚く、搬入品の可能性が高い⁶⁾。13は肥厚帯を2段に分けてタマキガイにより鋸歯文を施している。口縁部は水平に近く外反する。Ⅲ-b期併行と考えられる。長門では1段で鋸歯文が施されるものが多いので、模倣品である可能性が高い。

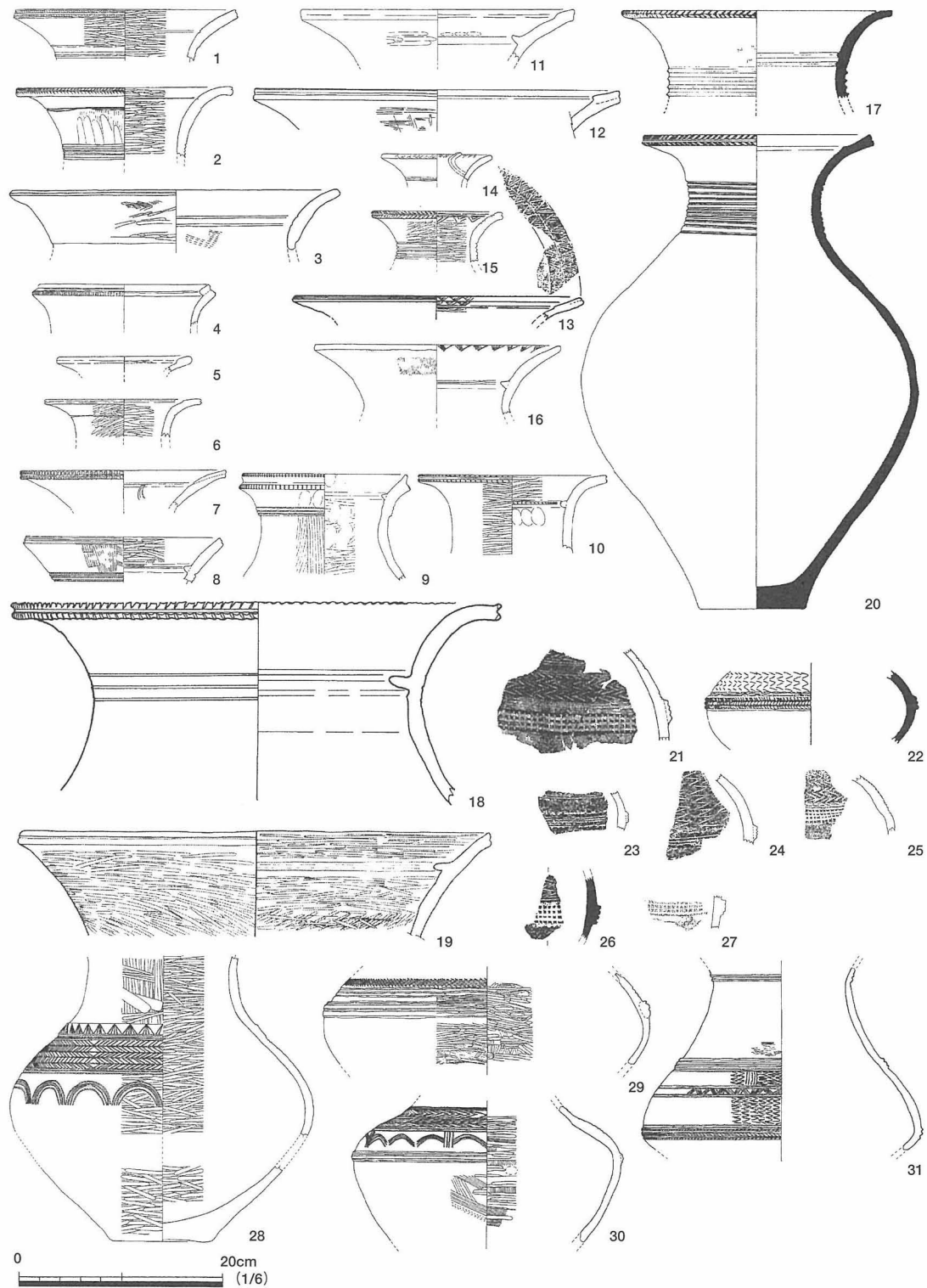
6は口縁部上端がほぼ水平に外反する。肥厚帯は薄く、内面突帯をもたない。7は肥厚帯が痕跡的でその下位に注口状の貼付突帯を施す。20は口唇部に有軸羽状文を施している。口縁内面は緩やかに内湾するが、肥厚させているのが観察できた。完形で断面が観察できないため、貼付の有無は判断できない。頸部に11条のヘラ描直線文を施す。これらはいずれも内面の貼付突帯はなく、肥厚帯のみを模倣している。

14は口唇部に無軸羽状文を施し、内面に鋸歯文、その下位に注口状の貼付突帯を施す。風化のため、施文具は不明確であるが、線が極めて細く、シジミなどの小型の貝の腹縁を使用した可能性が考えられる。頸部には2条のヘラ描直線文を施す。15は、口縁部内面にタマキガイによる3条の直線文を施し、その下位に鋸歯文を施す。16は口縁部内面にタマキガイにより鋸歯文を施す。これらのように肥厚帯を持たず、鋸歯文を施すものは豊後・台ノ原遺跡(後藤ほか1975)や、周防・赤妻遺跡(鈴木編1993)の壺などにもみられ、綾羅木系土器の分布圏の縁辺部における模倣に伴うものと理解できる。

3. 口縁部内面の直線文、貼付突帯 (図6)

直線文を施すものは少ない。1は口唇部の上下端に刻みを施し、段の下位に2条のヘラ描直線文を施す。口縁部形態からⅢ-a期に併行するものと考えられる。2は口縁部形態からⅢ-b期に併行するもので、

山陰地方における綾羅木系土器の展開



1、8、28 川向 2、6、14、16、17、23、24 タテチョウ 3、5、7、11、25、29~31 西川津
 4 古屋敷 9、10 布田 12 西大路土居 13、18 目久美 15、21 惣の尻 19 長瀬高浜
 20 七尾台状墓Ⅱ 22 松ヶ丘 26 松ヶ崎 27 竹野
 ※時期は本文末に掲載

図6 山陰地方におけるⅠ-3~4期の綾羅木系土器1

直線文は貼付突帯を意識したものと考えられる。3は口縁部内面に2条の直線文を施す。口縁部形態からⅢ-a期に併行するものと考えられる。2条の直線文は貼付突帯を意識したものである可能性が高い。

貼付突帯を施すものも少ない。8は口唇部に板状工具による直線文を2条施し、段の下位にも板状工具による直線文を3条施す。このように板状工具による施文も見られる場合は綾羅木系土器との関連が深いと考えられる。しかし、突帯上に刻みをもつもの(10)や注口状のもの(14)、2条の貼付突帯をもつもの(17)は瀬戸内との関連が考えられる。また、刻みを持たない1条の貼付突帯を施すものには、紐穴をもつものがみられる。紐穴をもつ壺は畿内・瀬戸内との関連が考えられるものである(豆谷1991)。従って、18、19のような壺は、綾羅木系土器とともに畿内・瀬戸内の影響も考慮する必要がある。

9はJ-1類である。口唇部には刻みを施しており、口縁部の段上には板状工具による3条の直線文が施される。内面には貼付突帯を施す。口縁部形態からⅢ-a期併行と考えられる。ほぼ同じ形態の壺が鰐石遺跡からも出土している⁷⁾。J-1類は山形重弧文と同様に長門でも内陸部を中心に分布する壺であり(田畑1999、2000)、当地との交流を裏づける資料と評価できる。

4. 頸部(図6~8)

頸部中位に文様を施すものもあるが、全面に施すもの(図6-20)中位から下位にかけて施すもの(図8-6)がある。また、貼付突帯と直線文が組み合うもの(図10-9)、貼付突帯のみもの(図6-17、図7-1~4)などがあり、基本的には瀬戸内・畿内と共通したものが多い。その一方で、綾羅木系土器と関連するものとして断面M字状の貼付突帯に羽状文や突帯と直交して刻みを施すもの(図7-1~4)、頸部の段もしくは直線文下にタマキガイによる羽状文を施すもの(図8-1~4)があるが、これらは綾羅木系土器にはみられないものであり、模倣したものと考えられる。

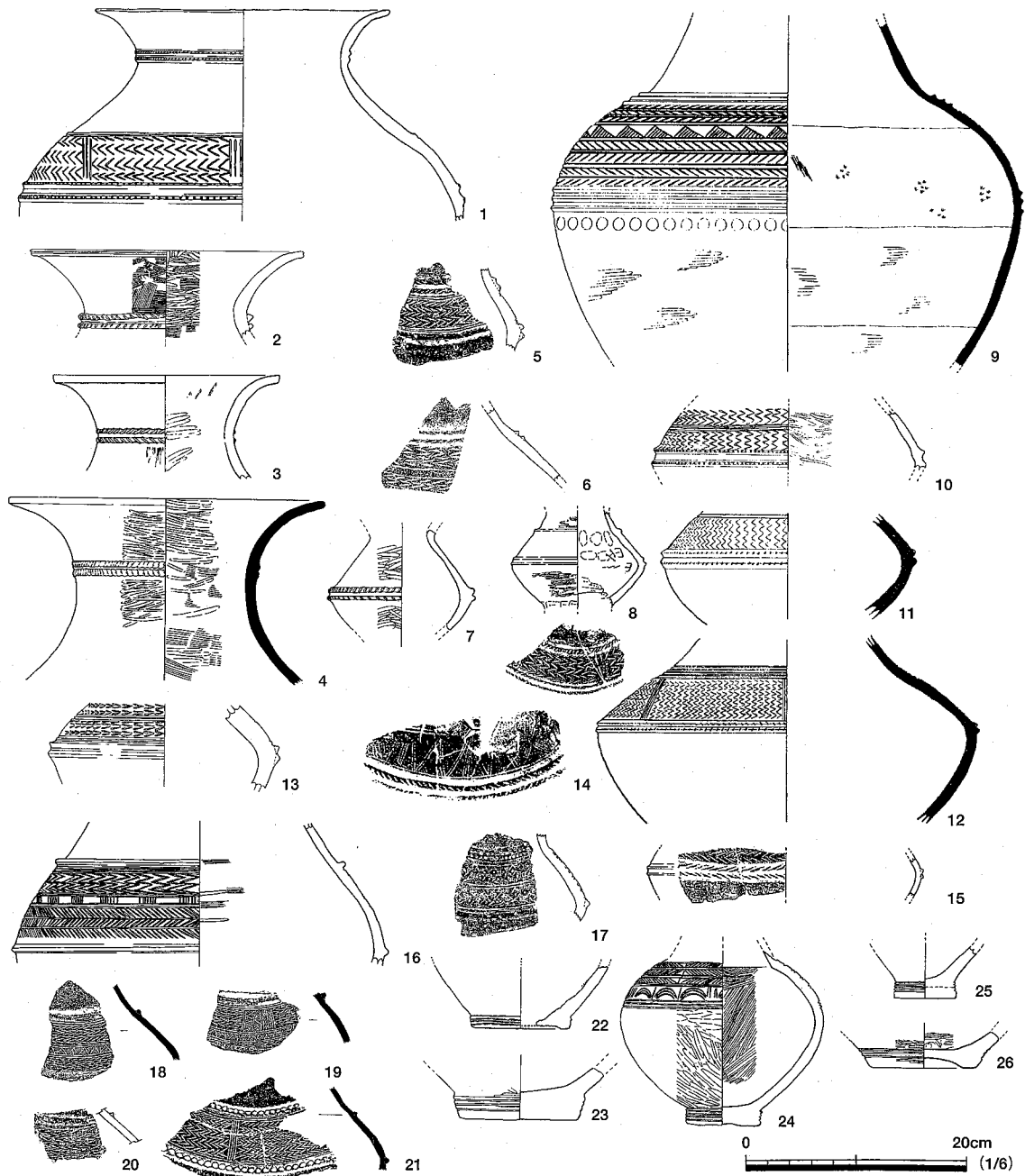
5. 頸胴部界・胴部中位の区分文様(図6~8)

頸胴部界は、A:段とその下位に直線文をもつもの、B:断面台形の貼付突帯をもつもの、C:断面三角形の貼付突帯をもつもの、D:M字状の貼付突帯をもつもの、E:2条以上の貼付突帯をもつもの、F:1~3条の直線文をもつもの、G:4条以上の直線文をもつものに大別できる。胴部中位はB~Fに大別できる。頸胴部界・胴部中位とも綾羅木系土器にみられるBは非常に少ない。Eは石見、出雲では少ないが、伯耆以東では多くみられる。これらに貝殻施文をもつものは少ない。

Bの図6-23、24は綾羅木系土器と近似しており、突帯上にタマキガイによる3条の直線文を施す。しかし、21、26、27のように突帯に直交して刻みを加えるもの、25のようにそれを直線文に置き換えたものは長門ではほとんど見られないもので、瀬戸内・畿内の多条突帯に刻みを施したものの影響が考えられる。

C、Dで刻目をもたないものは綾羅木・高槻系土器のうち、北九州~豊前地域に多い属性である。従って、図7-16~20は高槻系土器の影響が考える必要がある。9は頸胴部界、胴部中位に断面三角形の無刻目突帯を3条施す。突帯間には上から無軸羽状文、鋸歯文、有軸羽状文を施す。そして黒色物を塗布した後に鋸歯文間、胴部中位の突帯間、胴部中位の突帯下に彩文を施している。黒色物を塗布し彩文を施す点は畿内・瀬戸内の影響が考えられる。しかし、胴部文様は精緻に施されており、突帯に刻目を持たない点から、高槻系土器の影響が考えられる。一方、刻みをもつもの(図7-21)は畿内・瀬戸内の影響と考えられる。

Dは多く見られるが、刻目を持たないものは少なく、羽状文や突帯と直交してヘラ・板状工具・貝殻に刻みを施すものが主体である。この点は長門と共通する。ただし、前述のように、長門では頸部に同様の突帯は施さない。



1、16 古屋敷 SKY-02 2、6、7、23、26 西川津 3 目久美 4、21 松ヶ崎
 5、10、17、24、25 タテチョウ 8、15 蔵ヶ崎 9 波来浜 11、12 途中ヶ丘 13 川向
 14 上野 18、19 函石浜 20 長瀬高浜 22 鰯石 ※時期は本文末に掲載

図7 山陰地方におけるI-3~4期の綾羅木系土器2

F、Gは瀬戸内・畿内と共通する器形に貝殻施文による胴部文様を付加したものである。報告された資料をみる限り、綾羅木系土器の文様（貝殻施文および無軸羽状文）をもつ壺の胴部の頸胴部界においては、段に1~3条の直線文を施すAが主体であり、胴部中位においてはFが多い。従って、これらの多くは前期II期~III-a期の土器と考えられる。一方、4条以上の多条の直線文をもつGに綾羅木系土器の文様をもつものは少ない。これはIII-b期に綾羅木系土器が減少傾向にあることを反映したものであろう。現状では、伯耆以東で確認することができないが、出土量が少ないためか、地域性によるものか判断できない⁶⁾。

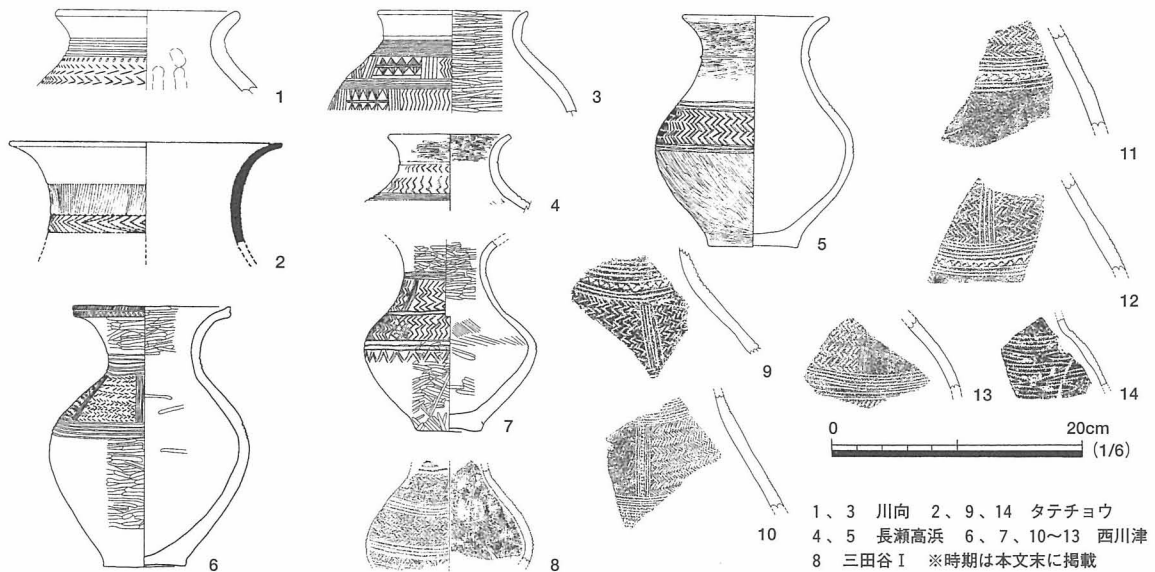


図8 山陰地方におけるI-3~4期の綾羅木系土器3

6. 胴部文様 (図7~9)

主体となるのは無軸羽状文で、そのほかに山形文、鋸歯文、木葉文、流水文などがある。貝殻施文による羽状文では、鋸歯状圧痕が下を向くものが目立つ。本稿で掲載した図では、図7-8、12、15、図8-3、6、7、9、11で羽状文の全体もしくは一部の鋸歯状圧痕は下を向いている。木葉文は中部瀬戸内、流水文は東日本の影響により描かれたもので、木葉文には山陰独自のモチーフである可能性をもつものがあり(深澤1987)、流水文においても特徴的なものがみられる。図8-14はタマキガイを使用している。鋸歯状の圧痕は直線文を含めてすべて下向きであり、模倣により描かれたことを裏づけている。東西の影響が反映された典型的な土器といえよう。

文様構成をみると、胴部突帯や底部の区分文様に影響が認められるものは、文様が精緻で綾羅木系土器に近似したものが多いが、Gには羽状文を主体とした簡略化された文様が多い。また、タマキガイ・ベンケイガイを使用するものは綾羅木系土器と比べて鋸歯状圧痕の幅が狭く、羽状紋を構成する斜線が短い傾向にある⁹⁾。これは山陰地方のI-4~II期の壺が比較的大型のものでも器高約30~40cm、胴部径約20~30cmのものが多いのに対し(松本1992)、綾羅木式土器は器高40~60cm、胴部径の30~50cmと山陰地方よりも一回り大きいことが関係しているのではないかと考えられる。つまり、山陰地方の壺は綾羅木式土器に比べて施文範囲が小さいため、使用するタマキガイ・ベンケイガイも小型のものが選択されたのではないだろうか。

7. 底部外面文様 (図8)

底部を円盤貼付状に突出させるものは石見~出雲地域から出土しているが、数は少なく、現状では伯耆以東で確認できない。22はタマキガイによる直線文を施す。24は胴部にタマキガイによる有軸羽状文、重弧文を施している、胴部が小型・球形であることからIII-a期併行と考えられる。搬入品もしくは忠実な模倣品と考えられる。

4 まとめ—山陰地方における綾羅木系土器の特徴—

山陰地方における弥生文化の成立にあたっては、日本海を介したルートと山間部を介したルートによる東北部九州、響灘沿岸地域の影響と山間部を介した瀬戸内の影響が考えられる。三田谷Ⅰ遺跡の壺に見られるように日本海を介したルートの重要性は疑いの余地がない。山陰地方に展開する列状配置墓域（山田2000）が認められる墓に副葬された壺には、前期Ⅱ期併行の壺と器形や文様に共通点が多く、そこから漁民を中心とした少数の人の移住が想定される（田畑2003）。しかし、瀬戸内と共通して口縁部が長くなるものが出現することや、津和野町大蔭遺跡で段に刻みをもつ甕など山口市小路遺跡と近似した土器が出土している例、匹見町イセ遺跡で前期Ⅰ-b～前期Ⅱ期の山形重弧文が出土している例は、縄文時代以来の山間部を介したルートも看過できないことを示している。一方で、突帯文系土器がⅠ-3期まで残存することも土器様相を考える上で重要である。山陰地方と長門の綾羅木系壺を比較すると、Ⅰ-1～2期において最も共通性がある。一方で、当初から胴部文様のみを模倣する傾向が認められ、Ⅰ-3～4期への模倣へ連続し、地域色が強まってくる。このような綾羅木系土器にみられる独自の地域性は、縄文系の集団と人の移住をともなう北部九州・長門、瀬戸内との地域間交流によって発現したものと考えられる。

Ⅰ-3～4期における山陰地方の綾羅木系土器は親縁性の高い順からA：搬入品、もしくはそれに準じた綾羅系土器に近似した土器、B：区分文様、胴部文様を模倣するもの、C：区分文様を模倣するもの、D：文様のみを模倣するものに分けることができる。Aは少なくB～Cが主体となる。

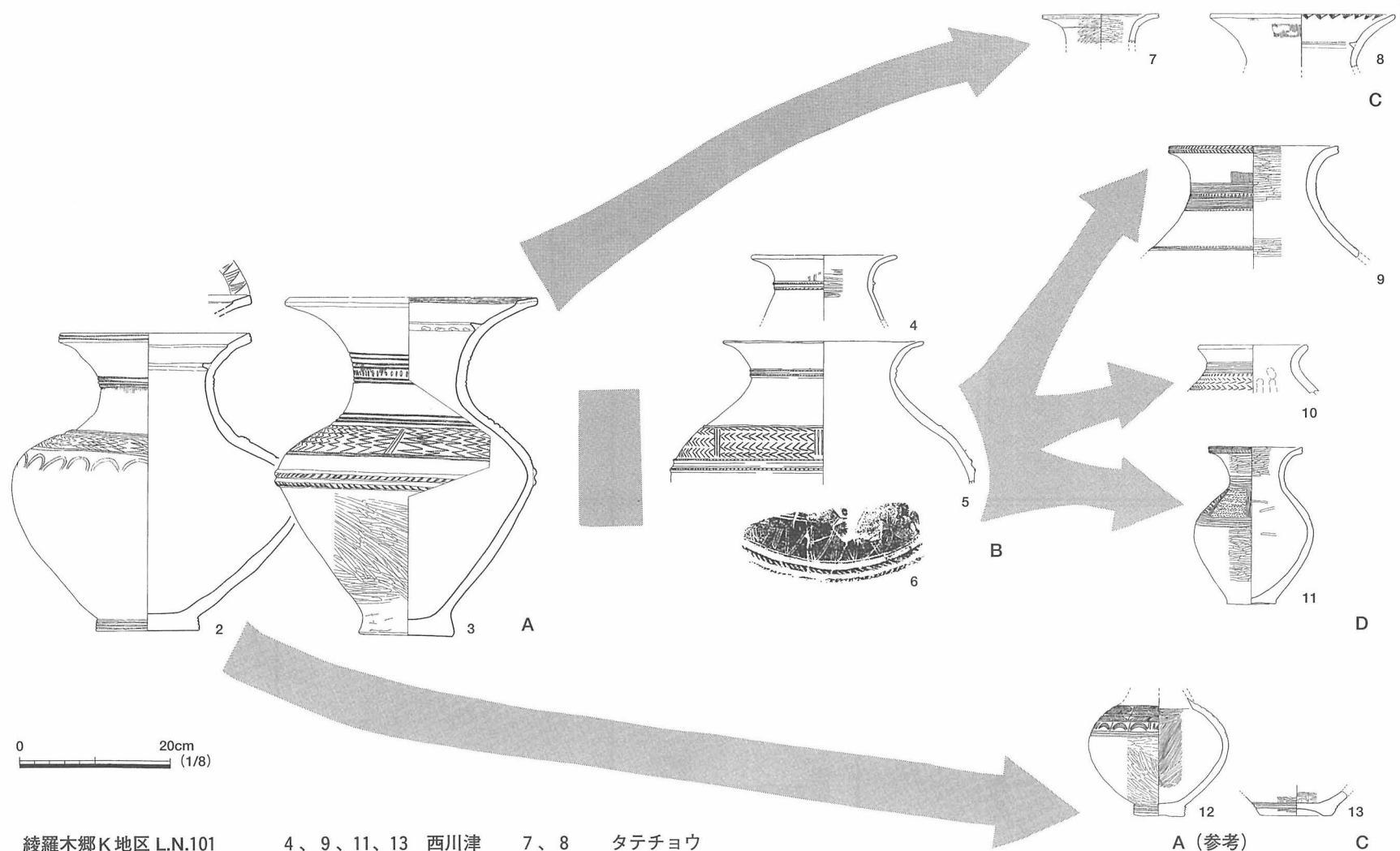
Bは、胴部に主に羽状文を施し、区分文様に長門にも見られる有軸羽状文、もしくは突帯に直交した刻みを施したM字状の貼付突帯を多用する点が特徴である。胴部形態においても強く張り出すという共通点をもつ⁽¹⁰⁾。全形がわかるものは少ないが、山陰地方では口縁部に内面肥厚をもつものが極めて少ないことから、内面に肥厚帯をもたず頸部にも胴部と同様な突帯をもつ（図7-1）組み合わせが主体となるものと推測される。綾羅木系土器に多い断面台形の貼付突帯、豊前に多い無刻のM字状の貼付突帯は少ない。

Cには口縁部内面の肥厚帯およびその文様と円盤貼付状の底部を模倣するものがある。胴部に比べると極めて少ない。

Dは口唇部、頸部、多条の直線文間、甕の口唇部、胴部などに認められる。特に口唇部に羽状文を施すものは多く、中期初頭まで残存する。破片資料が多いため、上記のように分類したが、B～Dは同一個体で組み合わせるものが一定量存在するものと考えられる。

この時期においては、Aが少ないことから前期Ⅱ期と比べると豊前～長門からの人の移住はごく少数で、漁労や交易を介した情報伝達によって、綾羅木系土器が製作されたのでないかと推測される。そして少数のAをもとに、胴部の文様を模倣したB、区分文様を模倣したCが生み出され、さらにA、BからDにみられるように羽状文が多様に用いられる点に特徴がある（図9）。この時期は山陰地方において突帯文系土器が急速に減少する段階と一致しており、これらは遠賀川式土器への移行とともに生み出された独自の地域色と評価できる。また、Bは壺全体に占める割合が低いこと、黒色物塗布をともなうものがあることから瀬戸内・畿内における彩文土器のような用途をもっていた可能性がある。このような模倣形態は基本的に石見地域から丹後地域まで共通しており、山陰内における緊密な交流がうかがえよう⁽¹¹⁾。

一方で豊前・長門と山陰地方において認められる共通点にも注意しなければならない。貝殻施文においては基本的にタマキガイ・バンケイガイによる羽状文を施す点が共通していることは重要である⁽¹²⁾。羽状文を模倣するのみであれば、施文具は貝であっても異なる貝種が多く使用されるのではないだろうか。また、Bが区分文様、胴部文様、胴部形態が共通していることは、土器を飾る点においてある程度の共通認



- 1 綾羅木郷K地区 L.N.101
- 2 綾羅木郷AⅢ地区 L.N.59
- 3 綾羅木郷GⅡ地区 L.N.5603

- 4、9、11、13 西川津
- 5 古屋敷 SKY-02
- 6 上野

- 7、8 タテチヨウ
- 10 川向

A (参考) C

図9 山陰地方における綾羅木系土器の模倣 (I-3~4期)

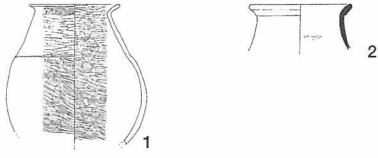
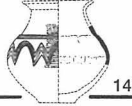
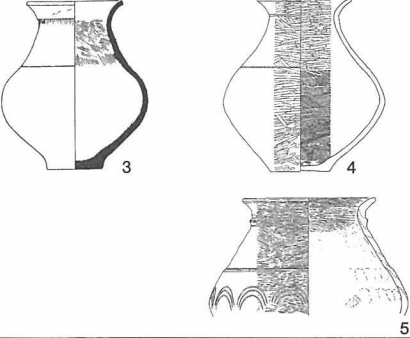
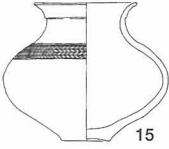
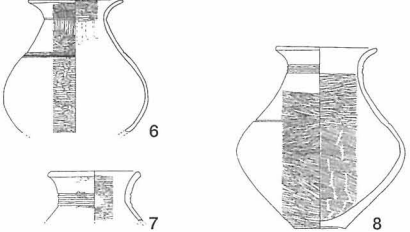
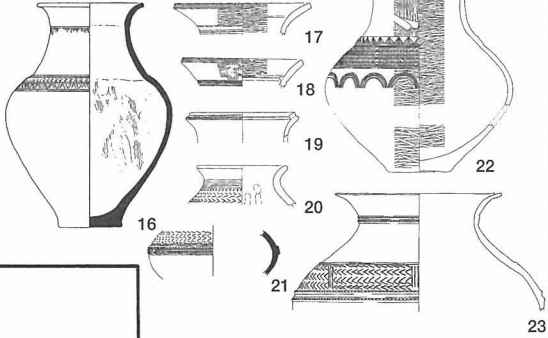
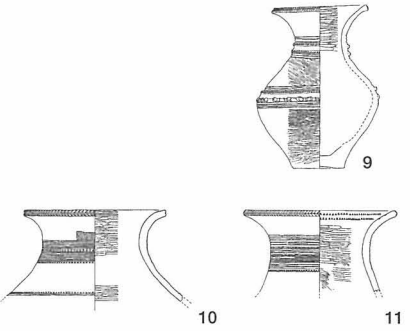
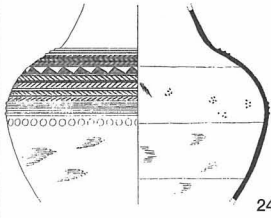
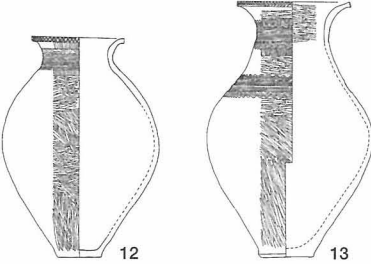



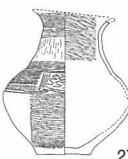







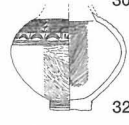

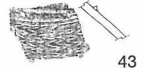
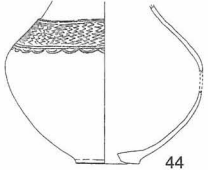


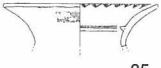
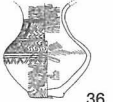

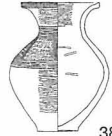







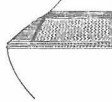
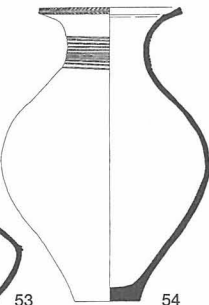
	出雲・隠岐 (在来系)	石見
I I 1		
I I 2		
I I 3		
I I 4		
II		<p>石見</p> <ul style="list-style-type: none"> 14 イセ 15 古屋敷 SKY-02 16 鯉石Ⅲ区 4号土坑 17、18、20、22 川向 19 古屋敷 15 古屋敷 SKY-09 24 波来浜

図10 山陰地方における綾羅木系壺の編年 S = 1 / 12 断面図 S = 1 / 6

出雲・隠岐	因幡・伯耆	丹 後
 <p>25</p>	 <p>39</p>	
 <p>26</p>  <p>27</p>	 <p>40</p>  <p>41</p>  <p>42</p>	
 <p>28</p>  <p>29</p>  <p>30</p>  <p>31</p>  <p>32</p>  <p>33</p>	 <p>43</p>  <p>44</p>	 <p>49</p>
 <p>34</p>  <p>35</p>  <p>36</p>  <p>37</p>  <p>38</p>	 <p>45</p>  <p>46</p>  <p>47</p>  <p>48</p>	 <p>50</p>  <p>51</p>  <p>52</p>  <p>53</p>  <p>54</p>
<p>出雲・隠岐 1～3、7、9、11～13、 27、28、32、33、35、37 タテチヨウ 4、6、8、10、30、31、34、 36、38 西川津 5 北講武氏元 25 三田谷 I 26 古浦 29 布田</p>	<p>因幡・伯耆 39 長瀬高浜 SI169 40 長瀬高浜 SI156 41、42、43、47 長瀬高浜 44 古市河原田 45 西大路土居 46 目久美 48 上野</p>	<p>丹後 49 函石浜 50 松ヶ崎 51～53 途中ヶ丘 54 七尾台状墓Ⅱ</p>

※枠内の前後は時間差を示さない

識が存在したことを推測させる。それはまた、土笛の分布から推測される精神的觀念の共通性が反映されたものとも考えることもできよう。

周防・長門ではⅢ-a期からⅢ-b期にかけて壺の加飾化がいつそう進行するが、山陰地方における綾羅木系土器はⅠ-3期を境に減少する。Ⅰ-4期に成立する環濠集落、出雲・田和山遺跡、伯耆・清水谷遺跡、諸木遺跡、天王原遺跡、尾高御建山、今津岸の上遺跡、丹後・途中ヶ丘遺跡などでは時期的に比較的まとまった資料が得られているが、綾羅木系土器は極めて少ないようである。その要因としては西日本各地で認められ、環濠集落の出現にみられるように、人口増加による社会的緊張によって地域社会の再編が進行し、土器製作上の交流が規制されていたことが推測される。

しかし、前期末から中期初頭においては、北部九州では北陸産の翡翠（高倉1988）、碧玉が増加するとともに、山陰では鉄器・青銅器の波及がうかがえ、日本海沿岸地域における相互交流はむしろ活発化している。この状況は、各地域社会及びそのリーダーを単位とするより意図的な交易（村上2002）が出現したことを意味している。その交易の基盤となったものこそ、山陰地方に体系的な水稻耕作をはじめ、綾羅木系土器、土笛、各種の磨製石器、結合式釣針、南海産貝輪、列状配置墓域などをもたらし、長門・北部九州に翡翠、碧玉をもたらした弥生文化成立以来の情報網であったのである。

以上、山陰地方の綾羅木系土器について検討を行った。山陰地方の綾羅木系土器の多くは包含層出土の部分的な破片が多く、因幡以東ではそのような資料でさえ少ないのが現状である。今回検討を行った以外にも、壺における板状工具による押圧施文などの諸属性、他器種の動向など検討すべき項目は多い。今後も調査を継続し、機会を改めて検討を行いたい。

謝辞 本稿執筆にあたっては、資料の実見などで下記の個人、機関に便宜をはかっていただいた。なお、2001年11月17・18日に「山陰地方における弥生時代前期の地域相」をテーマに開催された西伯耆弥生集落検討会に参加させていただき、本稿を執筆する上で多くの有益なご教示を得た。また、図版作成には河原剛氏の援助を受けた。記して感謝いたします。

赤澤秀則、伊東照雄、梅木茂雄、岡林峰夫、榊原博英、澤下孝信、下高瑞哉、新林尚美、末永博憲、田部秀男、中川寧、長嶺康典、長谷川達、濱田竜彦、平石充、深田浩、古庄浩明、松下孝幸、松本岩雄、宮田健一、村岡和雄、森下衛、山中英彦 鹿島町教育委員会、京都府埋蔵文化財センター、京都府立丹後郷土資料館、江津市教育委員会、島根県埋蔵文化財センター、島根県立博物館、下関市立考古学博物館、津和野町教育委員会、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム、仁摩町教育委員会、浜田市教育委員会、峰山町教育委員会、山口県埋蔵文化財センター、米子市教育委員会

註

- (1) 豆谷和之氏は綾羅木系土器群という名称を使用する（豆谷1995a）。
- (2) 筆者はⅠ-a期のヘラ描施文の原体においても鋸齒状圧痕をもたない貝を使用していた可能性を考えている。また、以下でヘラ描と記述するものにおいても、同様な可能性がある。
- (3) 綾羅木・高槻系土器に一般的な貝殻施文はタマキガイ・およびベンケイガイを使用したことが知られている。しかし、伊東照雄氏より多くはタマキガイであろうが、両者の厳密な区別は困難であるとのご教示を得た。従って筆者がタマキガイによる施文と判断したものなかにはベンケイガイで施文された可能性もある。このほか、伊東氏からは貝殻施文について、懇切丁寧なご教示と貴重な標本をいただいた。記して感謝します。

- (4) 未報告資料。津和野町教育委員会 宮田健一氏のご好意で言及を許していただいた。
- (5) 梅木2001に掲載された弥生時代前期の貝殻施文土器のうち、6点の直線文の鋸歯状圧痕が下向きであることが確認できる。
- (6) 西伯耆弥生集落検討会の際に実見させていただいた。
- (7) 鰐石遺跡の未報告資料は、浜田市教育委員会 榊原博英氏のご好意で実見させていただき、実測図を提供していただいた。
- (8) 釋龍雄氏は「貝殻施文土器の出土量が鳥取、兵庫北部で少なく、山口県、島根県東部、京都府北部で多いことは、この三地域が殊に密接な関係にあったことを示している」と指摘する（釋ほか1992）。秋山浩三氏によれば、山陰地方においても伯耆西部は瀬戸内甕の分布が20%強を占めており、周縁の様相をもつとしながらも瀬戸内型甕の中心的分布圏に含まれている（秋山1992）。この状況からこの地域では山陰地方の他の地域よりも瀬戸内の影響が強かったことがうかがえる。ただし、I-3期のまとまった資料が少ないので、資料の増加を待ちたい。
- (9) 行橋教育委員会2002における展示解説で同様な指摘がある。
- (10) 丹後地域では、釋龍雄氏が「貝殻施文は壺形土器に限られており、施文帯も胴部に限られ、羽状文が大半を占める点は共通している。さらに形状面からみると、胴張りの強い比較的大型壺に多い傾向を示している」と指摘している（釋ほか1992）。
- (11) 従って、山陰地方に見られる綾羅木・高槻系土器のすべてが豊前～長門の直接的な影響によるものではなく、例えば、丹後地域では出雲・伯耆地域との関係を考慮する必要がある。
- (12) 綾羅木郷遺跡においてもタマキガイは5090点中、3点であり、食料源の対象としてほど遠く、施文具として用いられたと推測されている（伊東1986）。この点は山陰でも同様であり、西川津遺跡でタマキガイが出土しているが量的には少ない（高安・角館1988）。また、タマキガイ・ベンケイガイは水深5～10mに生息することから意図的な採集が考えられている（伊東1980）。しかし、強い北西の季節風が吹く冬季においては、海浜に打ち上げられていることが多い。筆者も2月～3月にかけて土井ヶ浜海岸で多数のタマキガイを採集することができた。従って、意図的に採集されていた可能性については慎重な検討が必要であろう。

引用・参考文献

- 赤澤秀則 2000「墓と海と一島根の弥生文化の一側面一」大阪府立弥生文化博物館 2000『神々の源流—出雲・石見・隠岐の弥生文化—』84-89頁
- 秋山浩三 1992「3. 弥生時代前期土器—遠賀川式土器の地域色と吉備—」『吉備の考古学的研究』上巻 75-110頁
- 石井清司 1989「丹後・丹波地域」寺澤薫・森岡秀人編『弥生土器の様式と編年（近畿編I）』280-321頁
- 石井清司編 1989『京都府弥生土器集成』（財京都府埋蔵文化財センター）
- 石井龍彦 1984「Ⅲ 高槻式土器について」山口大学人文学部考古学研究室『西部瀬戸内における弥生文化の研究』山口大学人文学部考古学研究報告 第3集 113-120頁
- 磯田由紀子 1988「山陰地方における前半期弥生文化の一考察」『島根県考古学会誌』第5集 1-16頁
- 伊東照雄 1980「弥生式土器の文様と施文具」『日本民族とその周辺 考古篇』269-286頁
- 伊東照雄 1986「4. 貝殻文」金関恕・佐原眞編『弥生文化の研究』第3巻 弥生土器I 83-88頁
- 内田律雄・江川幸子 1996「島根県の前期弥生土器」『西部瀬戸内の弥生文化—前期弥生土器の諸相—』山口県考古学談話会百回記念実行委員会 107-122頁
- 梅木謙一 2001「伊予の弥生時代貝殻施文土器—下関地域との関係を考察する—」『研究紀要』第5号 下関市立考古博物館 1-14頁
- 大阪府立弥生文化博物館 2000『神々の源流—出雲・石見・隠岐の弥生文化—』
- 小田富士雄・黒野肇 1961「高槻遺跡弥生式資料集成—土器編—」小田富士雄1983『九州考古学研究』弥生時代編所収 632-650頁
- 倉光清六・藤田等 1962「山陰弥生式土器の研究（1）鳥取県西伯郡所子・上野遺跡」『考古学雑誌』48-2 20-36頁
- 後藤宗俊ほか 1975『台ノ原遺跡』大分県文化財調査報告書第33冊 大分県教育委員会
- 近藤喬一・乗安和二三 2000「弥生前期の土器文様」『山口県史』資料編 考古1 831-885頁
- 山陰中央新報社1978『さんいん古代史の周辺 上』
- 酒井仁夫・伊崎俊秋 1981『今川遺跡—福岡県宗像郡津屋崎町所在遺跡の発掘調査報告書—』津屋崎町教育委員会
- 酒井仁夫 1987『宗像 大井三倉遺跡』宗像市文化財調査報告書11 宗像市教育委員会

山陰地方における綾羅木系土器の展開

- 佐藤浩司・木太久守 1987『井手尾遺跡』北九州市埋蔵文化財調査報告書56 (助北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室
清水眞一 1992「因幡・伯耆地域」 正岡陸夫・松本岩雄編『弥生土器の様式と編年 (山陽・山陰編)』木耳社 355-
412頁
- 下條信行 1989「2 鳥根県西川津遺跡からみた弥生時代の山陰地方と北部九州」『朝酌川河川改修工事に伴う西川津
遺跡発掘調査報告書V (海崎地区3)』鳥根県教育委員会 325-340頁
- 釋龍雄 1988「第7章 第1節 山陰日本海沿岸前期弥生遺跡の動向」峰山町教育委員会『扇谷遺跡発掘調査報告書』
153-166頁
- 杉原荘介 1943『遠賀川一筑前立屋敷遺跡調査報告』
- 杉原荘介 1948「出雲原山遺跡調査概報」『考古学集刊』第1巻 第1冊 1-7頁
- 高倉洋影 1988「ヒスイの道」『Museum Kyushu』26 28-33頁
- 高橋 護 1987「遠賀川式土器」金関 恕・佐原 眞編『弥生文化の研究』第4巻 弥生土器II 雄山閣 7-16頁
- 高安克巳・角館正勝 1988「西川津遺跡遺跡弥生層出土の貝類について」『朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘
調査報告書V (海崎地区3)』鳥根県教育委員会
- 谷本進 1992「但馬地域」正岡陸夫・松本岩雄編『弥生土器の様式と編年 (山陽・山陰編)』木耳社 319-354頁
- 田畑直彦 1999「綾羅木式土器と阿方式土器」『山口大学文学会誌』第49巻 263-264頁
- 田畑直彦 2000a「関門地域における弥生文化の成立」『第47回 埋蔵文化財研究集会 弥生文化の成立—各地域にお
ける弥生文化成立期の具体像— 発表要旨集』75-100頁
- 田畑直彦 2000b「西日本における初期遠賀川式土器の展開」『突帯文と遠賀川』913-956頁
- 田畑直彦編 2001『上東遺跡弥生時代遺物編』山口市教育委員会
- 田畑直彦 2001「湯免式壺について—角島・沖田遺跡出土の新資料—」『山口考古』第21号 54-61頁
- 田畑直彦 2002「吉永遺跡⑤地区 SK048出土の弥生時代前期土器」『吉永遺跡 (IV地区)』(助)山口県教育財団山口県埋蔵
文化財センター 75-78頁
- 田畑直彦 2003「長門北浦地域における弥生文化の成立」『立命館大学考古学論集III—家根祥多さん追悼号—』
- 西伯耆弥生集落検討会編 2001『山陰地方における弥生時代前期の地域相—資料集—』
- 濱田竜彦 2000a「山陰地方における弥生文化成立期の様相—山陰東部を中心に—」『第47回 埋蔵文化財研究集会
弥生文化の成立—各地域における弥生文化成立期の具体像— 発表要旨集』55-74頁
- 濱田竜彦 2000b「因幡・伯耆地域の突帯文土器と遠賀川式土器」『突帯文と遠賀川』349-378頁
- 濱田延充 2000「口縁端部を刻まない甕—山陰地域の遠賀川式土器—」『みずほ』第34号 28-41頁
- 東森市良 1971「山陰における農耕文化の開始 (1)」『山陰史談』第3号 山陰歴史研究会 1-32頁
- 東森市良 1972「山陰における農耕文化の開始 (2)」『山陰史談』第5号 山陰歴史研究会 1-25頁
- 東森市良・前島己基・松本岩雄 1977「弥生式土器集成」『八雲立つ風土記の丘研究紀要I』
- 藤田等・潮見浩 1966「II 弥生文化の発展と地域性 2 中国・四国」和島誠一編『日本の考古学』3 弥生時代 河出書房
新社 81-107頁
- 秀坂真樹 1978「鳥根県下の前期弥生式土器」『松江考古』創刊号 4-6頁
- 深澤芳樹 1987「木葉紋と流水紋からみた西川津遺跡」『朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書V (海
崎地区3)』鳥根県教育委員会 135-142頁
- 松本岩雄 1992「出雲・隠岐地域」正岡陸夫・松本岩雄編『弥生土器の様式と編年 (山陽・山陰編)』木耳社 413-482頁
- 松本岩雄 1992「石見地域」正岡陸夫・松本岩雄編『弥生土器の様式と編年 (山陽・山陰編)』木耳社 483-519頁
- 豆谷和之 1991「前期弥生土器考」『唐古』田原本唐古整理室 OB会 20-28頁
- 豆谷和之 1995a「前期弥生土器出現」『古代』第99号 48-73頁
- 豆谷和之 1995b「付篇II 山口県弥生土器集成I—山口市小路遺跡出土の前期弥生土器—」山口大学構内遺跡調査研
究年報XIII 103-116頁
- 村上 勇・川原和人 1979「出雲・原山遺跡の再検討」鳥根県立博物館調査報告2 1-37頁
- 村上恭通 2002「特輯『弥生社会の多角的解明』に寄せて」『古代文化』第53巻4号
- 山口讓治編 1992『那珂5』福岡市埋蔵文化財調査報告書291 福岡市教育委員会
- 山田康弘 2000「山陰地方における列状配置墓域の展開」『鳥根県考古学会誌』第17号 15-38頁
- 山本 清 1969「山陰地方」『新版考古学講座4 原始文化〈上〉』62-74頁
- 行橋市歴史資料館 2002『平成14年度企画展 豊の国のエンブレム 貝で飾った土器』

渡辺誠 1989「西川津遺跡出土漁具の文化史的背景」『朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書V（海崎地区3）』鳥根県教育委員会 303-324頁

遺跡文献

豊前

長嶺正秀・末永弥義編 1985『下稗田遺跡』行橋市文化財調査報告書 第17集

長門

伊東照雄編 1981『綾羅木郷遺跡Ⅰ』下関市教育委員会

井上武彦・柿本春次編 1979『寺秋遺跡・湯免遺跡』山口県教育委員会

岩崎仁志・大村秀典編 1986『綾羅木郷台地遺跡（上ノ山地区）』山口県埋蔵文化財調査報告第91集 山口県教育委員会

金関文夫・坪井清足・金関恕 1961「山口県土井浜遺跡」『日本農耕文化の生成』第一冊 本文編

国分直一・伊東照雄・木下尚子 1988「中ノ浜遺跡の弥生時代前期埋葬 第一次調査報告」『地域文化研究』第3号

鈴木卓編 1993『赤妻遺跡Ⅱ』山口県埋蔵文化財調査報告第154集 山口県教育委員会

豊浦町教育委員会編 1984『史跡中ノ浜遺跡』

乗安和二三編 1982『土井ヶ浜遺跡第7次発掘調査概報』豊北町埋蔵文化財調査報告第2集 豊北町教育委員会

乗安和二三編 1988『綾羅木郷台地遺跡（明神地区）』山口県埋蔵文化財調査報告第120集 山口県教育委員会

乗安和二三編 1985『中ノ浜遺跡第9次発掘調査概報』豊浦町教育委員会

富士埜勇 1976『上原遺跡 発掘調査報告Ⅰ』菊川町教育委員会

古庄浩明編 2000『角島・沖田遺跡』豊北町埋蔵文化財調査報告第18集 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム

村岡和雄編 1978『坂手沖尻遺跡 惣の尻遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告第42集 山口県教育委員会

山本博 1934「長門國大井村の弥生式土器について」『考古学雑誌』24-1

山本博 1935「再び長門國大井村の弥生式土器について」『考古学雑誌』25-1

石見

門脇俊彦編 1973『波来浜遺跡発掘調査報告書』江津市教育委員会

榎原博英 1996「鰐石遺跡について」『亀山』第23号 浜田市文化財愛護協会

新林尚美・長嶺康典編 1999『五丁地区遺跡群発掘調査報告書』仁摩町教育委員会

長嶺康典編 1993『川向遺跡発掘調査報告書Ⅰ』仁摩町教育委員会

前島己基 1973『浜田市鰐石遺跡』『季刊文化財』22 鳥根県文化財愛護協会

矢野健一 1993「イセ遺跡」『ヨレ遺跡、イセ遺跡、筆田遺跡』匹見町教育委員会

出雲

赤沢秀則 1989「講武地区県営園場整備事業発掘調査報告書4（北講武氏元遺跡）」鹿島町教育委員会

足立克巳 1983「布田遺跡」『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅳ 鳥根県教育委員会

石井悠・村尾秀信 1982『朝酌川河川改修に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅱ』鳥根県教育委員会

岩橋孝典編 2001『朝酌川中小河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第13冊西川津遺跡Ⅷ』鳥根県教育委員会

金関文夫 1968「鳥根県八束郡古浦遺跡」『日本考古学年報』16

佐伯徳哉・林健彦・瀬古涼子編 1992『朝酌川河川改修に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書Ⅳ』鳥根県教育委員会

内田律雄編 1989『朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書V（海崎地区3）』鳥根県教育委員会

鹿島町立歴史民俗資料館 1992『鹿島を掘る—よみがえる伝説の資料』

鹿島町立歴史民俗資料館 1999『99特別展 開拓者の眠るところ 速報！掘部第1遺跡木棺墓群』

鳥谷芳雄編 2000『三田谷Ⅰ遺跡 vol.3』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ 鳥根県教育委員会

中川寧編 1999『朝酌川中小河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第11冊西川津遺跡Ⅵ』鳥根県教育委員会

西尾克巳・佐伯徳哉・間野大丞編 1995『朝酌川河川改修工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 原の前遺跡』鳥根県教育委員会

西尾克巳編 2000『朝酌川中小河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第12冊西川津遺跡Ⅶ』鳥根県教育委員会

萩正人他 1991「布田遺跡」『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅷ 鳥根県教育委員会

前島己基・平野芳英・松本岩雄編 1979『朝酌川河川改修に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書Ⅰ』鳥根県教育委員会

松江市教育委員会 2001『田和山遺跡』

三宅博士・柳浦俊一編 1990『朝酌川河川改修に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書Ⅲ』鳥根県教育委員会

山陰地方における綾羅木系土器の展開

村尾秀信 1980『朝酌川河川改修に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅰ』鳥根県教育委員会
村上勇・加村健悟・稲根克也 1986『出雲原山遺跡発掘調査概報』大社町教育委員会
柳浦俊一編 1987『朝酌川河川改修に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書Ⅱ』鳥根県教育委員会

伯耆

会見町教育委員会 1975『諸木遺跡発掘調査概報』
岡田龍平ほか1993『天王原遺跡発掘調査報告書』会見町教育委員会
小原貴樹・北浦弘人 1986『目久美遺跡』米子市教育委員会
中森祥・濱田竜彦ほか『古市遺跡群1』(財)鳥取県教育文化財団
中山和之編 1991『今津岸の上遺跡』淀江町教育委員会
(財)鳥取県教育文化事業団 1981『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
(財)鳥取県教育文化事業団 1982『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
(財)鳥取県教育文化事業団 1983『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅴ』
(財)鳥取県教育文化事業団 1983『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅵ』
濱田竜彦・内田浩文ほか『古市遺跡群2』(財)鳥取県教育文化財団
平木裕子・佐伯純也 1999『長砂第3・4遺跡』米子市教育文化事業団
平木裕子 1999『長砂第3遺跡』米子市教育文化事業団
松本哲ほか1992『清水谷遺跡』西伯町教育委員会
山田真一ほか1995『尾高御建山遺跡Ⅱ・尾高古墳群Ⅱ・尾高1号横穴墓』(財)鳥取県教育文化財団

因幡

北浦弘人編 2001『青谷上寺地遺跡3』一般国道9号改築工事(青谷・羽合道路)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ
(財)鳥取県教育文化財団
谷口恭子編 1993『西大路土居遺跡』(財)鳥取市教育福祉協議会
(財)鳥取県教育文化財団 1996『桂美遺跡一八ツ割地区・堤谷東地区・堤谷西地区』

但馬

谷本進・田畑基ほか1982『但馬の弥生式土器(1)』『但馬考古学』1 但馬考古学研究会
松井敬代・宮村良雄他 1989『駄坂・舟隠遺跡群』豊岡市埋蔵文化財調査報告書22豊岡市教育委員会

丹後

京都府立丹後郷土資料館 1999『丹後発掘』(特別展図録30)
釋龍雄・林和廣 1968『京都府網野町松ヶ崎遺跡調査報告』『史想』第14号 京都教育大学考古学研究会
釋龍雄編 1977『途中ヶ丘遺跡発掘調査報告書』京都府峰山町文化財調査報告書第3集 峰山町教育委員会
釋龍雄・坪倉利正・田中光浩・林和廣 1975『扇谷遺跡発掘調査報告』京都府峰山町文化財調査報告第2集 峰山町教育委員会
釋龍雄・田中光浩ほか1988『扇谷遺跡発掘調査報告書』京都府峰山町文化財調査報告第12集 峰山町教育委員会
平良泰久・黒田恭正他 1983『丹後 竹野遺跡』『京都府丹後町文化財調査報告』2
田中光浩・林和廣 1982『七尾遺跡発掘調査報告書』京都府峰山町文化財調査報告書第8集 峰山町教育委員会
坪倉利正・釋龍雄・林和廣 1992『竹野弥生遺跡』丹後古代文化研究会
村田和弘 1997『1. 松ヶ崎遺跡発掘調査概要』『京都府遺跡調査概報』第75冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
森正・伊野近富・中川和哉 1993『(1) 蔵ヶ崎遺跡』『京都府遺跡調査概報』第54冊
吉田誠編 1996『竹野遺跡発掘調査概要』京都府丹後町文化財調査報告 第11集

※本稿で使用した土器の実測図のうち、図2-1、図6-4、13、14は筆者原図、写真1-4は筆者撮影である。他は各報告書から転載した。なお、図6-20は実見に基づき、一部を改変した。

図6~8掲載土器の時期

図6 I-3期 3~6、8、9、11、14、22、28~31 I-3~4期 21~27 その他I-4期
図7 I-3期 1、5、13、16、24 I-3~4期 6、17、20、22、23、25、26 その他I-4期
図8 I-2期 4 I-2~3期 5 I-3期 1、3 I-3~4期 14 その他I-4期